

七 日露戦争とその後の露語科

通訳として活躍する外語勢

すでに触れたように日露開戦（一九〇四〔明治三十七〕年）とともに第一軍の通訳となったのが井田孝平、第二軍には清水三三、またのちに外語教授となる松田衛（明治三十六年卒）は三菱を辞め奏任通訳官としてロシア語、中国語の通訳を務める。後に助教となる北島常晴（明治三十七年卒）は近衛歩兵少尉として出征、鴨緑江の最前線で副官を務めている。講師で陸大教授の小島泰次郎は出征し奉天で病没している。しかしそれだけの人数では足るわけもなく、ロシア語の場合は旧外語の卒業生十数名を徴用し、それでも足りないので七月卒業のところを、文部省の許可を得て三月二十三日に露清韓各語科の卒業試験を行うと同時に、校則を改め軍事通訳になるものための特別措置を講じた。第一に六月十五日から八月三十日まで露清両科の講習会を行い、清語科一二九名、露語科一八名が受講、露語科は夏期休暇を廃止している。最初の半年で一〇〇名以上の通訳を出していたが、清語科では二、三年生の優秀なるものを通訳とし、露語科では急を要したため、十一月二日に第二回目の繰上げ卒業試験を行っている。さらに翌一九〇五年の一月に旅順が陥落すると数万の捕虜が松山をはじめ日本各地の捕虜收容所に送られてきたため、二年生からも通訳を出し、それでも足らずに一年生まで実習生の名目で各收容所に派遣されることになる。また外語構内に特別室を設けて、教師、生徒一丸となって捕虜数千名の書類を翻訳したというから、とても通常の授業は出来なかつたであろう。ところが繰上げ卒業で生徒数に空きが出来たため、なんと生徒募集を三か月繰上げて、四月に入学試験をしたというのだから驚異的である。前述の松田によれば、現地で調達した通訳は床屋や大工、職人といった連中が多

かったため、軍隊ではあまり役に立たなかったそうだ。

日露戦争と外語の関係を考えるとき、思いの外重要な働きをしたのは、捕虜收容所の年若い通訳たちだった。ロシア人捕虜七万二、四〇八人が全国二九の收容所に入れられたのだから、大変な数である。しかもこれは一八九九年に俘虜の人道的扱いを決めたハーグ条約の最初の適用例であり、日本側はこれを忠実に守った。市の人口の六分の一にあたる六、〇一九人を收容した松山では、ロシア通の安藤謙介知事の指令により、ロシア人捕虜はかなり厚遇されている。数々の慰問や観光旅行、さらには学校を開いて捕虜同士がロシア語やポーランド語を教えるといったケースまであったという。『校友会雑誌』（一九〇六年）には外語から派遣された捕虜通訳のリストがある。「九州方面に鈴木尚三、十時惟親、新井三郎、三ヶ尻邦彦、酒井醇、石井良直等の諸氏、大阪、姫路、松山付近に太江久太郎、秋元義親、村田乙三郎、竹内秀三、大倉勲夫、鈴木相之助、八木明盟、伊崎千秋等の諸氏、高崎仙台方面には島田嘉一郎、近藤寶五郎等の諸氏が居て……」といった具合。しかも皮肉なことに、出征通訳よりもはるかにロシア語を使う機会が多かったため、捕虜通訳の会話能力は格段に進歩したという。出征通訳は大戦時こそ仕事はあったものの、それ以外は暇を持て余し、語学力を落とさぬように、定期的に通訳同士が集まって語学の練習をしたという。それはともかくこうした外語出身者の努力の甲斐あって、日露戦争以後ロシア人の間での日本イメージは非常に高まるのである。前述の極東旅行もこうした友好的な雰囲気があったからこそ実現したのであろう。そればかりではない。一九〇九（明治四十二）年以降、毎年ハルビン、ハバロフスクから主として学生からなる四、五〇名のロシア人旅行団が東京を訪れている。観光団到着の日には授業はすべて休校となり、教員、生徒全員が新橋駅に出迎えるならわしになっており、小石川植物園で、日露学生交歓会が開催されたのだった。ロシア側はロシア民謡やバラライカの演奏、コサックダンス、日本側からは剣舞や太神楽の余興が恒例となっていた。その後日露両学生が手を取り合って、園内を散策、

談笑し、最後の立食パーティーでは鈴木教授の見事な挨拶や生徒によるスピーチがなされた。この歓迎会には学校だけでなく日露協会からも財政的援助があったようで、校長はじめ非常勤をもふくめた露語科の全教員、それに日露協会からも来賓が出席していた。また鉄道省がこうしたツアーを企画したこともあり、外語の生徒は無料で通訳のサービスをしたという。しかもこうしたロシア観光団が一九一七（大正六）年の革命の年まで毎年来日していたという事実は、今日ほとんど忘れられているのではあるまいか。日露戦争以後ロシア革命にいたるまでの日露関係が、友好的なものだったことを物語るエピソードではある。

露語科の文学的風土

外語の授業内容が文学作品の講読を主体にしていたことはすでに述べた。こうした知的雰囲気のもとで米川正夫、中村長三郎（白葉）のようなすぐれたロシア文学者が育っていくのである。一九一〇（明治四十三）年の露語科には「露西亜文学会」と「氷山会」という二つの学生サークルがあったと山中忠雄（大正二年卒）が証言している。

当時、二年生には宮川先輩をリーダーとする氷山会（弁論部）と、中村長三郎、米川正夫両先輩の主催する「露西亜文学会」の二つのグループがあった。われわれ新入生はその入会勧誘を受け、この二つのグループに入会した。氷山会は隔週土曜日午後例会があり、トドロヴィチ先生も顧問格で指導され、発音やゼスチュアなどに多に寄与するところあり、特に語劇祭の場合など恰好の練習場、われわれ二年生の時、演出、好評を博したゴーゴリの「検察官」の舞台裏でもあった。……文学グループの方は八杉先生が協力され、放課後随時、教室で会合が催され、中村、米川両先輩からトルストイ、ドストエフスキー、チェーホフなどの作品や、生活ぶりなど聞かされ興味深いものがあった。中村先輩は商業学校出身であったが文章のペテランで、当時すでに文壇から囁目されていた。二期期に入ると雑誌露西亜文学の創刊が計画され、われわれもその準備に加勢させられた。……菊判、百ページぐらいで、一部二〇銭だったと思う。一同持ち回って宣伝につとめたが好評で

新聞にも紹介記事が出た。

〔ロシア学会報〕、第二四号、一九七八年

中村自身の回想によれば、この雑誌は谷崎や和辻ら帝大生を中心とした第二次「新思潮」、秋田雨雀等早大系の「劇と詩」の向こうを張って、事実なかなか評判になつたらしく、六〇〇部が完売になつたという。しかしこの出版活動にたいする上級生の反応は意外に冷たく、同人たちも徐々に抜け、結局米川と中村の個人雑誌になつてしまったようだ。そんなふたりが文学を志すうえで精神的に支えてくれたのが、少壮教授八杉貞利だつたと中村は述懐する。

しかしロシア語教育者としての八杉の心境は複雑だつたらう。当時神保町の三省堂近くの倶楽部の二階が露西亜会の会場と決まっていた、雑誌が出た直後でもあり、熱狂した文学青年たちは、『詩宗プーシキン』（時代思潮社、一九〇六年）の著作まである八杉に、文学に関する講演を注文した時のエピソードが残っている。

処が意外、八杉教授は純文学の研究は大学の文科と云つた方面に之を求むべく、語学校で習得すべき語学の目的は校則第一条に示す実務に適する語学の知識養成を目的とするところとある如くそれを基礎として海外に雄飛活動すべき士を養成する点にありと暗に文学愛好熱に浮かされて有頂天の連中に冷水三斗と云う処を浴びせられ、我徒海外雄飛組はトテモ痛快を覚えたものです。当時今の如く文科とか拓殖科とか云つた区別はなかつた折でもあり、文学者として許されたる八杉先生でも教育者たる立場にあつて外語出身者の向うべき道を指示されたことは卓見と云わねばならぬと我徒は更に感嘆したものです。

（大谷二郎、前掲誌）

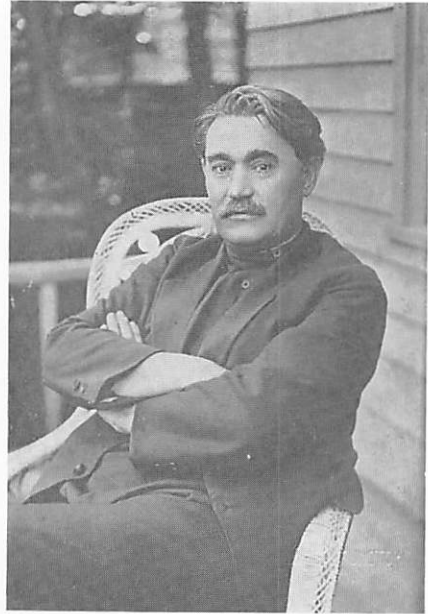
この八杉の発言のどこまでが本心かは分からないが、文学にも造詣の深かつた彼には、文学の厳しさが痛いほどわかつていたはずである。だからこそ雑誌の成功に浮かれています連中に釘をさす必要があると考えたであろう。卒業直前に米川と中村を特別に呼出し、東大の選科に入ることを勧めたのは、この二人には文学的才能があると認めたからだろう。堅苦しい校則など持ち出したのは、生徒の手前であり、また実用語学といつても言語学者の八杉が大谷たち

と同じレベルの語学を念頭に置いていたとは思えない。さもないれば八杉がトルストイやプーニンといった格調高い文体の作家を教材に選ぶわけもなからう。

八杉は語学教育に関しては厳格な態度を崩さなかったが、文学を志す才能ある学生には協力を惜しまなかったよう
で、和久利誓一の調査によると、詳細は不明だが大正の初期に富士辰馬による第二次「露西亜文学」が、また一九二
一（大正十）年から二四年までに蔵原惟人主宰の第三次「ロシア文学」が二〇号も出ていたという。そしてこの雑誌
には八杉自らグリボエドフの「知恵の悲しみ」、シチュドリン「ある町の歴史」、『果物語』などを載せているので
ある。なおこの雑誌には馬場哲哉、松永信成、鳴海完造、丸山政男、河野通弘、永田広志等が参加しているのである。
一九二一年という、すなわち新経済政策（ネップ）のはじまる年であり、新生ソ連ではいわゆるロシア・アヴァン
ギャルド運動が展開される一方でプロレトクリトに代表されるプロレタリア文学が台頭する時期でもある。そうした
混乱期にあえてロシア文学の古典とされる作品を翻訳するところに、時流におもねることのない八杉の気骨が感じら
れる。

トドロヴィチと語劇

ここでもう一つのサークル「氷山会」の指導をしたトドロヴィチについて述べておかねばならない。一九〇九（明
治四十二）年に八杉の招聘でハバロフスクから着任し、一九四〇（昭和十五）年まで三一年間、外語で教鞭をとった
彼は発音に厳しい教師であった。一年生の一学期は個々の母音と子音およびその結合の練習のみで、特にYとBl
の練習には、鉛筆を口の中に突っ込んだり、鏡とピンセット、鏡と鉛筆を携行させたという談話も残っている。二学
期以降は会話のテキストを予め暗記させ、生徒ふたりずつ組にして次々に会話をさせ、発音とイントネーションをチ



トドロヴィチ

う。また衣装はトドロヴィチ夫人が担当してくれた。他に娯楽が少なかったとはいえ、外語の語劇祭が東京中の名物として、多くの観客を集めた陰には、このトドロヴィチのような熱心な指導があったからだろう。外語の語劇祭が一体いつ始まったのかは、定かではないが、一九一〇（明治四十三）年には米川や中村が制服姿でドラマの台詞を繰返し練習させられていたと、前述の大谷は回想している。少なくとも翌一年には公使館から衣装を借り、「検察官」を上演したことが分かっている。とまれこの暗唱式の授業と語劇は、旧外語の朗読形式の授業とならんで、東京外語露語科のユニークな教育法として、昭和二十年代まで継承されることになる。

異色の教師・松田衛

一九三六（昭和十一）年の八杉の退官の後、主任教授（当時の呼称は主幹）となる松田衛は元來実業畑の人で、一

エックした。また二年、三年では地理、歴史も教えたが、これもテキストをすべて暗唱させる方針を崩さなかったという。しかしトドロヴィチの最大の功績は、語劇をロシア語教育の一環として組み込んだことであろう。今日と違って、語劇は最上級生の授業として扱われ、一学期から全員に台本を暗記させ、会話形式で発音を矯正していく。配役の決定は秋以降で、個別演技指導は指の動かし方、足の運び方、女の泣き方と徹底しており、残った生徒には自由作文を課して、これを点検、添削したとい



松田 衛

九〇三（明治三十六）年卒業後、三菱に入社するが、すでに述べたように日露戦争の勃発で志願して奏任通訳となり、ロシア語に加え現地で習得した中国語も操ったという。戦後はウラジオストックの東洋学院（極東大学の前身）の日本語講師となり、五年間教鞭をとった後、三井物産に入社、ハルビン支店に勤務した。一九一九（大正八）年松永信成教授が病気で倒れた時、滞露一七年の実績を買われ、鈴木於菟平に請われて母校に着任したのだった。彼の最大の業績は、独力で執筆し、自費出版した『松田和露大辞典』（東京堂、一九三三年）であろう。俗語や隠語まで多数収録した二二〇〇ページを超えるこの辞典は、その実践性でロシア語学習者に非常に役立つはずである。松田は停年まで一〇か月を残して一九四二（昭和十七）年五月に退官している。その退官記念パーティーの席上での神西清の挨拶「迫ってくる人格の力」は、この教授の人格を見事に言い当てている。「松田先生からはどうも語学を教わったというような感じがしません。これは勿論わたくしの不勉強がまずなによりもその原因なのですが、それにしても松田先生からは何かもつと別のもの、何かもつと人生に直接なもの、何かもつと人間の奥にあるもの、一口にいうと人格の力とでもいったものの方を、語学などよりもはつきりと植えつけられたような気がします」（『露西亜会会報』、第三一号、一九四二年）いかにも外語露語部の生んだすぐれた作家・翻訳家神西清の言葉らしい。この言葉通り、古武士のような風貌の松田は、豪放磊落で風流人でもあったらしい。一九五六（昭和三十一年）年没。



除村吉太郎

除村吉太郎の功績

戦前の露語部の教官で、生徒に大きな感化力をもった人物がもう一人いる。一九四〇（昭和十五年）年、その思想的傾向ゆえに、同僚、生徒たちに惜しまれながら教職追放（記録上は、依願退職）となった除村吉太郎（大正七年卒）である。一九二二（大正十一年）年からハルビン日露協會学校の教師を務め、一九二四年に母校助教教授となった除村は、一九三〇（昭和五年）年に教授に昇任、一九三五年には文部省の在外研究員として、二年間ロシアに留学する。

露作文やゴリキイ、チェーホフの作品を講読する一方、文科の授業ではフォークロア、詩論、文学史などを教えた。モスクワ滞在中の一九三六年に橘書店から出版された『露文解釈から和文露訳へ』は、一九四七年に増訂版が白水社から、さらに一九六七年に改訂新版が同社から出ている。露文の多くを著名な作家や評論家の文章から抜粋し、これを二〇〇余の公式に分類して周到精細な解説を付し、それに対応の作文問題を添えたもので、今も版を重ねる名著となっている。

外語追放後は、評論活動を行いながら『ロシア年代記』を本邦初訳している。戦後は、新日本文学会、ソヴェト研究者協会の中心メンバーとして活動する一方、日ソ学院院长として生涯をロシア語教育に捧げた。『露西亜年代記』、『ペリンスキー文学評論集』全二冊（岩波文庫、一九五七年）などの先駆的翻訳の他、『文学とインテリゲンチヤ』などの著作多数。一九七五（昭和五十）年七十八歳で没。

除村の教職追放はこの時代の思想統制を象徴する事件だが、共産主義国となったソ連の言語を専攻する露語部の学生の動向は、官憲によって監視されていた。そのことを察知していたであろう八杉貞利は、弾圧が学内に及ぶことを危ぶみ、学生たちに言動を慎むよう注意を喚起していた。しかしその八杉もソ連の文化的運動には無関心だったわけではなく、その証拠に昭和初年の講読のテキストに、プロレタリア文学の代表作であるグラトコフの『セメント』や十九世紀の革命思想家ゲルツェンの著作を取り上げていた。またソ連の国内情勢については、後述するように露西亜会の講演を通じて、ソ連に滞在した特派員や外交官によって最新情報もたらされていた。

左翼思想の浸透

そうした雰囲気の中で思想的に左傾化する学生も多く出、ロシア語の学習だけでは満足せぬ彼らは、自主的な研究会を持つようになっていった。そうした動きの一つが、外語社研の活動である。この外語社研（正式名称東京外国語学校社会問題研究会）に関する「外語社研の思い出」という手記が、『ロシヤ会々報』第二六号（一九八〇年）に掲載されているので、少し紹介しておこう。

社研の母体となったのは、一九二一（大正十）年露語部文科入学の森正蔵、吉見春雄、神沢虎夫、能勢寅造らによる読書会だった。前述の蔵原惟人らによる第三次「露西亜文学」が創刊されたのもこの年である。河上肇の『社会問題研究』や山川均の『社会主義研究』といった社会思想関係の雑誌を下宿で輪読することからはじまったという。

ちょうどこの頃、ロシア飢饉救済運動が盛んになり、学内でも募金運動が進められ、二一年秋の語劇大会ではゴリキーの『どん底』が演じられ、「ロシア飢饉救済」の名目で再度有楽座で公演し、その収益金をソ連大使館に寄付したという。そしてこの救援活動には露西亜会も関与していたというから、露語部全体が、新生ソ連の行く末を案じ

ていたと言えるだろう。

こうした背景の中で、先の読書会は堺利彦のM・L（マルクス・レーニン）会という学外団体とも関係を持ちはじめ、学内では他の語部の学生も加え、一九二二年秋に、一名の会員で外語社研が発足するのである。そして一九二二年十一月七日（ロシア革命五周年記念日）に創立された〈学生聯合会〉に外語社研の名で加盟することになる。吉見自身は第四回メーデーで検束され、一九二三年六月に授業料未納と出席不良の理由で退学を長屋校長から言い渡されるが、外語社研は一九三〇年前後まで存続し、そこには未来社社長西谷能雄（昭和十年退学）や一橋大学教授として多くのロシア文学、思想史研究者を育てた金子幸彦（昭和九年卒）らが名を連ねるのである。

外語のストライキ

西谷の名が出たので、彼が中心メンバーとなつて一九三二（昭和七）年六月に起こつた外語のストライキ事件に触れておこう。治安維持法によつて左翼運動が過酷な弾圧を受けていたこの時期に、全学ストライキを決行するとは暴挙とも言えようが、そこに筆者は明治以来の外語露語部の反権力的精神の伝統を見る。ストの直接のキツカケは学生食堂の値上げ問題だった。ウドンが四銭から五銭に、ライススケーが八銭から十銭に値上げされるとの貼紙が集会場に掲示されたことに端を発し、当時生徒課長として学生の思想調査に當つていた小林清貞教授の排斥運動へと発展、六月十七日に全学ストライキに突入したのだった。

ストは実質的には二週間（？）ぐらいつづいたように思う。……実質二週間のストの間、その継続のために、たえず学生大会が開かれ、アジ演説が行なわれ、「インターナショナル」が鳴らされた。生徒課までの長い廊下に各語部毎に、机、椅子が教室から持ち出されてうす高くバリケードがつくられた。もっとも戦闘的だったのはロシア語、ドイツ語、英語、フラ

ンス語、支那語部で、他の語部は傍観者的であった……。

（西谷能雄「外語ストの思い出」、「ロシヤ会々報」、第二五号、一九七九年）

一九六〇年代末の全共闘運動を彷彿とさせる光景だが、こんなことが特高に脅える一九三二年に外語で実際に起こっていたのである。スト参加者は続々と逮捕され、学内には放校処分（退学）の学生の名前が掲示されはじめる。結局このストで露語部の二年生は一名の放校、退学者を出す。西谷もその一人であった。そして、この一九三二年のストライキを境に、露語部の自由な雰囲気は、外部からの監視と圧力に晒されるようになる。

小出民声の業績

ここで今ではほとんど忘れられている外語露語部が生んだ気鋭のマルクス主義歴史家小出民声、筆名早川二郎のことに触れておこう。一九二五（大正十四）年、露語部文科に入学、同級生に神西清がいた。卒業後古本屋を営みながら、ブハーリンの『共産主義のABC』、リヤザノフ評注、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』、レーニン『国家と革命』などを翻訳、伏せ字だらけの彼の訳本は当時の青年にはかり知れない影響を与えた。

その後雑誌『無産者教育』、『労働者教育』の編集同人を経て、三木清、戸坂潤らの主宰する唯物論研究会に加わる。この頃から歴史に強い関心を寄せ、ボチャロフ、ヨアシニ共著『世界史教程』全五冊を完訳した他、コンラッド『日本歴史』、マチャール『支那の農業経済』、サファロフ『支那社会史』の啓蒙的歴史書も紹介した。

しかし何よりも彼が情熱を傾けたのは古代史研究であり、そのために「古代二郎」とあだ名されたという。マルクスのアジア的生産様式論に依拠しつつ、彼はそれを日本古代史に適用し、『大化改新の研究』、『日本歴史とアジア

的生産様式」など夥しい数の著作を残して、三十一歳の若さで一九三七（昭和十二）年奥秩父にて遭難死している。この時代にアジア的生産様式に着目した小出（早川）の歴史家としての先駆性は、再評価されるべきであろう。ちなみに長女小出真理は、詩人となり、ロシアの詩人マンデリシユタムの翻訳がある。

こうして露語部は、ほぼ同時期にマルクス主義の文芸理論家蔵原惟人と歴史家早川二郎、また作家、翻訳家として今なお高い評価を受けている神西清を輩出していたわけである。このような人材と、ともすると、過激な言動に走り易い学生を擁する露語部は、他の語部以上に特高のマークが厳しかったことは十分想像できる。

八 露語部の教育における「露西亜会」の役割

教育の一環としての露西亜会

「東京外語露西亜会」は鈴木於菟平教授在任中、一九二一（大正十）年前後にはすでに存在しており、会報も二回出たことがわかっているが、その会報も、また会の組織についての資料も残っていない。ただ、その組織は「種々の事情の為校の内外を打て一団とする意味に於て欠如たるものがあつた」という（『会報』第三号「本会新会則制定の経過」参照）。

鈴木教授が一九二三（大正十二）年夏ハルビンで客死した後、在校生も会員に加えて会の活動をより積極化しようという要望が高まり、一九二五（大正十四）年五月の集会で新しい会則が制定され、次いで翌二六年五月三十日の総会で八杉貞利教授が会長に推され、幹事七名（教官一、卒業生三、在校生三）が会長から指名された。

その年の七月に出た最初の会報は、鈴木教授時代に会報が二回出たことを考慮して「第三号」とされた。八杉会長